

MARRONS GLACES

といつてもいい位が栗である。南欧にも漸く秋が訪れて、朝晩の空気が澄んで夕べに肌寒さを覚える今日此頃は、街角に焼栗の立売が出るだろう。仕事帰りの庶民の秋のたのしみである焼栗は、自然の風味を味わうものだが、あのたくましい樹の実にロココ調のみやびやかな味覚技工を加えたのが、マロングラッセというものか。渴を医するビールの食事の味をよくする葡萄酒は好きだが、其他の酒と名のつく飲物をこのまぬ私の大好きなデザートは、マロンシャンテイリーである。豊かな栗の香とすべらかな生クリームとが、口の中でとけ合う味は天下第一品である。

いい年をしてマロングラッセだのプラリネが好きだなんていってると、女子供じゃあるまいしと辛党からは一笑に付されるだろうが、なにも味覚の領域迄も党派をつけて世間を狭くすることもあるまい。先人の残してくれた美風を甘辛の差別なく万遍なく賞味してこそ、現世に生きる欣ではなかるうか。もつとも野郎が一人でマロンをほおぼっている図なんて何となくみずばらしい。

あれはマドモアゼルと一緒に食べたいものだ。

一九六〇年 仲秋

(オリンピック組織委員会 事務局参事)



マロン・グラッセ

麻生武治

ローマ市の南郊三十軒程の処に法皇の別荘カステルガンドルフォがある。海抜四百米ばかりの丘の上に部落があつて、そのガンドルフォの村の裏手が崖になつて広々と鏡の様なアルパノ湖をみはるかす眺めは素晴らしい。日本なら北海道の摩周湖といった型の火口湖で、切立ての崖下に洋々たる水をたたえているのが、南欧の明かるい空の下にあるから摩周湖とちがつてどこ迄も陽気な湖水である。今夏オリンピックのボート競技の行われたのはこの湖面である。

日本のエイトがドイツやアメリカの強クルーを相手に健闘した日、私もこのレガッタを見んものと湖畔に出かけたが、スタート迄時間のあつたのを幸にガンドルフォとは対岸の丘ロッカ・ディ・パーバに登つてみた。ローマ近郊きつての展望台でカンパーニアの眺め、目のとどく限りは葡萄畑である。ローマの地酒の出来るフラスカーティの村もこの丘の麓にある。

さてこのロッカ・ディ・パーバの丘は、全山緑樹に蔽われ、そのことごとく